



役割の中で

緊張が消えたあと、役割が残る。

人は、緊張しているあいだはまだ存在に近い。

けれど、それが消えたあと、
別の構造が静かに始まる。

役割を担うことは、悪ではない。
期待に応えることも、誤りではない。

社会の中で位置を持つことは、自然なことだ。

問題は、
役割が外にあるうちは起きない。

評価が外にあるあいだ、人は緊張する。
だが、それが内側に取り込まれたとき、緊張は消える。

そのかわりに残るのは、
「こう振る舞うべきだ」という静かな規律。

やがて人は、
期待されている通りに話し、
求められている通りに立ち、
役割としての自分を滑らかに再現する。

だが同時に、
存在が自分の重心を、
わずかに外へ預けた状態でもある。

役割は、鎧ではない。
むしろ、うまくできすぎた衣装だ。

長く着ていれば、
それが身体だったのか、
布だったのか、
わからなくなる。

緊張が消えたのは、
強くなったからではない。
評価が、内側に定着しただけかもしれない。

静かにうまくやれているとき、
あなたはどこに重心を置いているだろう。





Edition — 存在の芯
別景：役割の中で

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026